わせ、大阪地域の主要MSM向け商業施設集積エリアにアクセスするMSM実数が全て明らかとなった。

2) 日本エイズ学会（2007年）シンポジウムについて

日本エイズ学会（2007年）で開かれたシンポジウム「MSM集団はHIV/AIDS対策においてhard-to-reach populationか？～コミュニティ規模調査後のMSM向け予防戦略を検討する」において、「感染がどこで起こっているのか」「予防事業にとって最もニーズの高いクライアントがどこにいるのか」を知るための情報の共有が目指された。各シンポジストの発言の要旨は以下の通りであった。

- 大阪を例にとると、MSMの総数は成人男性人口に占める割合（3～4%）から15万人程度と推定される。一方で大阪地域のMSM向け商業施設利用者の母集団は3万人程度と推定され、（山田創平/財・エイズ予防財団）図5に示す。
- インターネット調査の結果から、ゲイタウンを利用しなおかつハッテン場も利用する“行動のアクティブな層”がHIVをはじめとするSTIの既往歴が高いということがわかる。また、“行動のアクティブな層”では受検行動も高い（日高庸晴／京都大学大学院）。
- 東京医科大学での臨床経験からわかることは、生涯で初めての検査でHIV感染が判明する例が多いということ。ここには認識不足、リスク軽視で感染してしまう若年層や、感染可能性を強く意識しながら検査を逃避している層、発症をおそれながら身動きができずにいる層があるように思われる。患者からは、自らの行動がアクティブであることを前提とした上で「いつか感染すると思っていました」「自分が感染したときよりも、今の方がひどいですよ。」などの表明が聞かれる（山元泰之/東京医科大学）。
- 沖縄では行政の公表する動向データと臨床の現場での状況に乖離がある。この点は非常に重要で、沖縄県の3つの拠点病院を受診したHIV陽性者数は行政統計の130%増しであり、かつ陽性者中に占めるMSMの割合ははるかに大きい。つまり沖縄の実際の状況は臨床の現場しか把握できていない状況がある。このような状況の下、琉球大学医学部付属病院では、地方特有の状況が見て取れる。それは、MSM向け商業施設の利用者よりもむしろ、非利用者に陽性例が確認されるということである。地縁が非常に顕著であるという地域特性や、携帯サイトの利用などが背景にあると考えられる。

3) まとめ

以上の研究知見からわかることは、主に以下の3点である。

- 都市部では、MSM向け商業施設を中心としたネットワークの中でHIV感染が起こっている可能性が示唆される。
- 地方では、商業施設以外のネットワークでHIV感染が起こっている可能性が示唆される。

行政の発表する発生動向に見られる新規感染者の増加傾向が、上記2点の要因によるものかはわからない。実際には数年前の感染が近年判明している例もあるはずであり、“新規感染がどれだけあるのか”つまり発生動向の増加傾向が新たな感染者が増えている結果なのかどうかはわからない。“感染がどこで起こっているのか”を見極めるためには、初診時CD4などのデータにより、そもそも新規感染が増えているのかを知る必要がある。

D. 結論

この三年間に得られたエビデンスをもとに大阪地域MSM集団への予防介入事業を一次予防、二次予防、三次予防の視点からまとめたのが図6、表9である。

未感染者の推定約15万人、うちゲイタウン利用者層3～4万人を主なターゲット層として、MASH大阪が前述のようなプログラム群を提供して

いる。大阪地域で感染が分かっているMSMは800～900人程度とみられる。感染しているがそのことに気づかず、治療に接続されていない人の数を決定するのは現時点では困難だが、これまで得られた様々なエビデンスを総合すると、ゲイタウン利用者層のHIV陽性は5%前後と推測される。ここで仮に、ゲイタウン利用者層を除くMSM集団の陽性率を1%と想定すれば、地域の潜在的陽性者数は約3200人、2%と想定すれば地域の潜在的陽性者数は約4400人となる。したがって二次予防の対象となる層の規模は2300～3600人程度と推定される。この数字は、感染が分かっており実際に治療を受けているMSMの3～4倍に相当することから、この層への二次予防介入が緊急の課題であると推測できる。

E. 発表論文等

（論文発表）

1) 鬼塚哲郎，辻宏幸：MASH大阪によるゲイコミュニティ向けHIV/STI予防活動，保健師ジャーナル，第61巻，第2号：184-188，2005
2) 鬼塚哲郎：ゲイコミュニティへの予防介入事業，その現状と課題，日本エイズ学会誌，第6巻，第3号：141-144，2004
3) 市川誠一，木村博和，鬼塚哲郎，松原新，佐藤未光，井戸田一朗：MASHによる啓発活動，総合臨床，50：2805-2810，2001
4) 山田創平：大阪市北区堂山町の系譜－性的表象と都市をめぐる試論－，京都精華大学紀要，31:155-169，2006
5) 鬼塚哲郎，山田創平：感染に脆弱な集団にどう予防介入するか～マイノリティ集団における一次予防、二次予防、三次予防のあり方を検証する，治療学，vol.42-no.5，2008（2008年5月刊行予定）

（口頭発表：2001年度～2006年度）

1) 厚生労働省 HIV 感染症の疫学研究班，MASH大阪，MASH東京，（財）エイズ予防財団：MSMにおけるHIV/STD感染とその予防に向けて，第15回日本エイズ学会総会サテライトシンポジウム，2001.11.30，東京
2) Garrett Prestage (Univ. of New South Wales)，河村昌伸 (Angel life NAGOYA)，鬼塚哲郎（MASH 大阪）：ゲイコミュニティとAIDS，第16回日本エイズ学会総会シンポジウム，2002.11.29，名古屋
3) 木村博和，市川誠一，鬼塚哲郎，松原　新，辻宏幸：MSMに対する大阪地域でのコンドーム・アウトリーチの効果，第17回日本エイズ学会総会，2003.11.29，神戸
4) 木村博和，市川誠一，鬼塚哲郎，辻宏幸：大阪のMSM向け臨時HIV/STI検査・予防相談の3年目の受検者の特性，第62回日本公衆衛生学会総会，2003.10.24，京都
5) Onitsuka, T.　Matsubara, A.　Tsuji, H.　Satoh, T.　Kimura, H.　Onizuka, N.　Ichikawa, S.：Analysis on MASH-Osaka Project~the first HIV Prevention Intervention Project in Japan, the 6th International Congress on AIDS in the Asia and the Pacific, Melbourne, 2001.10.8
6) 鬼塚哲郎，市川誠一，他：大阪地域におけるMSMへのHIV/STD予防啓発のニーズとプログラム、第60回日本公衆衛生学会総会，2001.11.01，香川
7) 鬼塚哲郎，市川誠一，他：MASH 大阪・SWITCH2001における臨時予防相談・検査を実施して，第15回日本エイズ学会総会，2001.12.01，東京
8) 山田創平，鬼塚哲郎：MSM コミュニティの規模を推定するための社会地理学的研究－大阪市北区堂山町周辺を事例として－，日本エイズ学会，2006年，東京
9) 鬼塚哲郎、山田創平：市民公開講座「なぜ男性同性間でHIV感染は増えたか－その対策は何をどうしてきたか、そしてこれからどうして行くか－，大阪における

エイズ対策～これまで、これから」日本エイズ学会，2006年，東京

10) 中村英芳，内田優，金子典代，大森佐知子，土井信吾，鬼塚哲郎：コミュニティスペース“diata”における対話型HIV／STI 予防啓発プログラムの実践に関する研究，日本エイズ学会，2006年，東京

11) 金子典代，大森佐知子，木村博和，辻宏幸，鬼塚哲郎，市川誠一：大阪地域の予防介入プログラムの評価とHIV感染予防行動の関連要因に関する研究，日本エイズ学会，2006年，東京

12) 北村広美，宇野賀津子，鬼塚哲郎，池上正仁：ボランティア活動を通じたHIV/AIDSに関する理解の促進～7th ICAAPの経験から～，日本エイズ学会，2006年，東京.

13) 山田創平：非営利組織のソーシャルマーケティングーワークモティベーション理論を中心にー，エイズワーカーズ福岡年度総会，2006年，福岡

14) 鬼塚哲郎：シンポジウム「セクシュアリティと人権～LGBT の課題にどう取り組むか，求められているのはコミュニティ？ネットワーク？～エイズ予防の経験から」大阪府立女性総合センター（ドーンセンター）共催事業，2006年，大阪

15) 鬼塚哲郎，山田創平：パネルディスカッション「ゲイコミュニティへの予防をどう展開するか」大阪地域における同性間のHIV/STI感染予防啓発の普及促進に関する研究成果発表会，扇町公園 PLuS+実施会場，2006年，大阪

（口頭発表：2007年度）

16) 山田創平：ボランティア・社会活動の意義と展望ーモティベーション理論を中心として，京都府健康対策室，エイズ市民ボランティア研修会，2007年，京都

17) Sohei Yamada: A socio-geographical method for estimating MSM population accessing a Gay commercial area in Osaka, Japan for the purpose of developing HIV prevention education materials and programs, the 8th International Congress on AIDS in the Asia and the Pacific, Colombo, 2007

18) Tetsuro Onitsuka: Gay community or MSM? Who should be the focus of our education and support program? , the 8th International Congress on AIDS in the Asia and the Pacific, Colombo, 2007

19) 鬼塚哲郎，岩川洋成，松尾恵，小山田徹，佐藤知久，雨森信，鍵田いずみ，大野聖子，山田創平：京都府エイズ等性感染症公開講座，2007年，京都.

20) 高鳥毛敏雄，市橋恵子，木村博和，下内昭，山田創平，市川誠一：厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業国民向け研究成果発表会（関西地域でのエイズ予防の現状を考えるフォーラム），2007年，大阪

21) Sohei Yamada: Socio-geographical Research for estimating MSM population in “Gay town” area in Japan, German-Japanese Scientific Panel against AIDS, 2007, Hiroshima

22) Tetsuro Onitsuka: MASH-Osaka An example of one model for conducting HIV Prevention among Gay-communities in Japan, German-Japanese Scientific Panel against AIDS, 2007, Hiroshima

23) 鬼塚哲郎，辻宏幸，塩野徳史，後藤大輔，鍵田いずみ，内田優，町登志雄，山田創平，市川誠一：“いきなりエイズ”をどう減らすかーHIV 感染リスクに曝されている層への予防介入の実践ー，日本性感染症学会・日本エイズ学会合同シンポジウム，2007年，東京

24) 山田創平，鬼塚哲郎，中村英芳，町登志雄，塩野徳史，市川誠一：MSMコミュニ

ティの規模を推定するための社会地理学的研究－大阪市浪速区恵美須東(新世界)地区、難波4丁目（ミナミ）地区を事例として，第 21 回日本エイズ学会，2007年，広島

25) 大森佐知子，内田優，中村英芳，祝雄一，川合亮，原澤俊也，鍵田いずみ，塩野徳史，町登志雄，後藤大輔，辻宏幸，山田創平，鬼塚哲郎，市川誠一：MSM を対象としたグループレベルの HIV/STI 予防啓発プログラムの評価に関する研究－プログラムスタッフへのインタビュー調査から－，第21回日本エイズ学会，2007年，広島

26) ジェーン・コーナー，金子典代，鬼塚哲郎，生島嗣，山田創平，辻宏幸，佐藤未光，張由紀夫，砂川秀樹，後藤大輔，塩野徳史，岳中美江，市川誠一:Middle-aged and older gay men, married men, and HIV: Summary of the epidemiology, social research and implications for education and support interventions，第21回日本エイズ学会，2007年，広島

27) 金子典代，山本正弘，佐藤未光，鬼塚哲郎，日高庸晴，市川誠一：携帯電話を用いたゲイ・バイセクシュアル男性の社会的ネットワークと HIV 感染リスクに関する調査，第 21 回日本エイズ学会，2007年，広島

28) ジェーン・コーナー，金子典代，鬼塚哲郎，生島嗣，佐藤未光，張由紀夫，辻宏幸，後藤大輔，塩野徳史，山田創平，砂川秀樹，岳中美江，市川誠一：MSM & HIV testing: Analysis and evaluation of the international literature - What are the implications for Japan?，第21回日本エイズ学会，2007年，広島

29) 鬼塚哲郎，佐藤知久，山田創平，日高庸晴，健山正男，山元泰之： MSM 集団は HIV/AIDS 対策において hard-to-reach population か？－コミュニティ規模調査後の MSM 向け予防戦略を検討する，第21回日本エイズ学会，2007年，広島

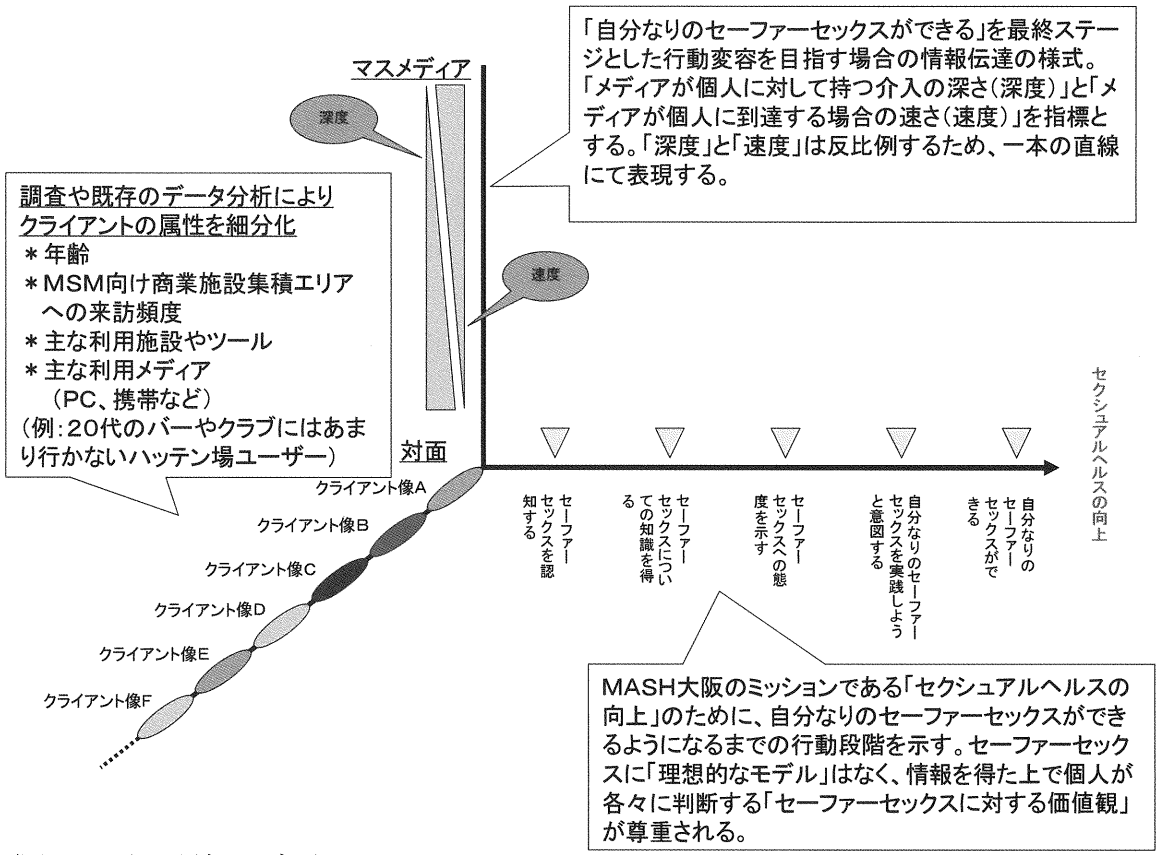
30) 市川誠一，木村博和，塩野徳史，狩野千草，金子典代，福山由美：保健所での HIV 抗体検査事業のありかたを考える－ターゲット層を意識した効果的な検査相談提供のために－，第66回日本公衆衛生学会自由集会，2007，愛媛

31) 金子典代，山田創平，日高庸晴，小堀栄子，川畑拓也：厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業国民向け研究成果発表会（個別施策層への HIV／エイズ対策における学際的連携の可能性－若手研究者の研究事例報告を中心に)，2007年，広島

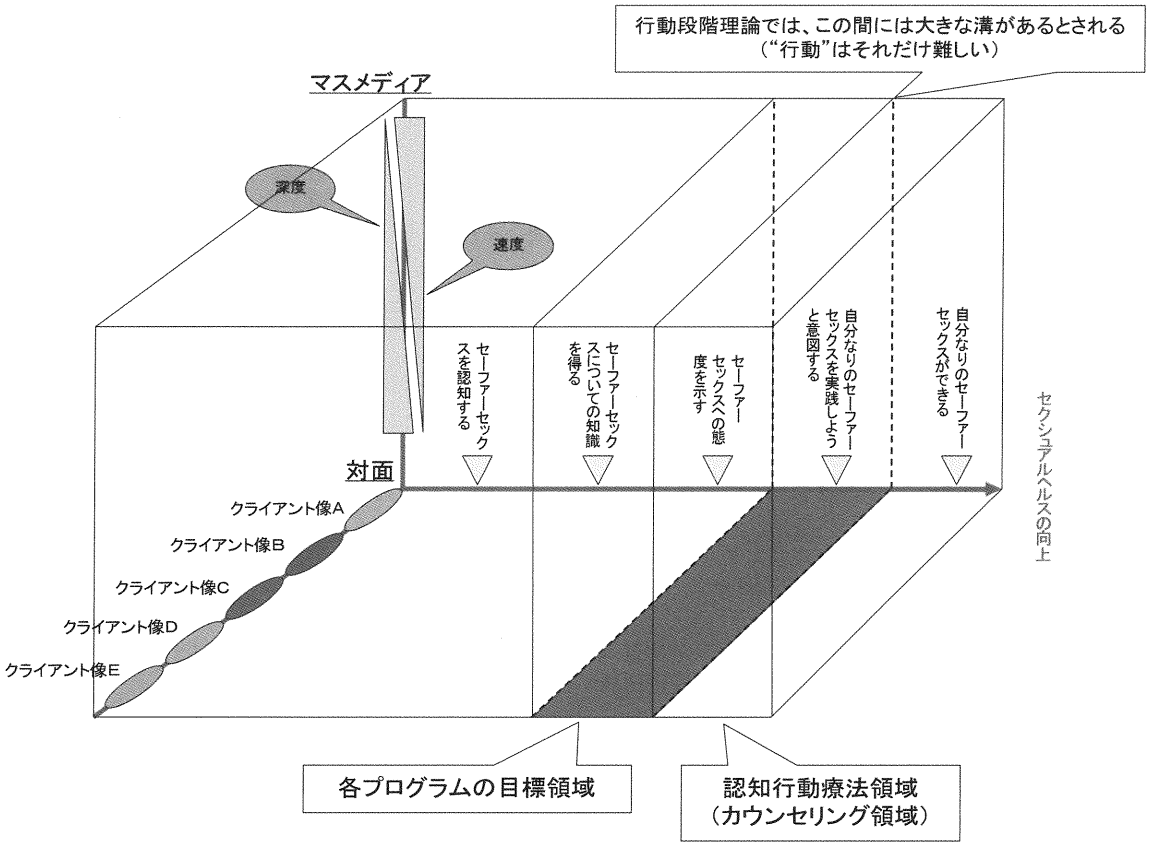
32) 鬼塚哲郎，山田創平，日高庸晴：MSM 集団における HIV/AIDS 予防対策の現状と課題，大阪大学大学院健康政策学各論/社会環境医学セミナー（市民向け公開講座），2007年，大阪

表 1. 大阪地域 MSM の性的健康の状況

調査・資料	調査結果・資料より導き出された課題	平成 19 年度終了時の到達目標
SWITCH2000-2002 の調査	【梅毒の拡がり】 受検者の 14.6%～19.4%が梅毒 TPHA 陽性	
	【HIV の拡がり】 受検者の 1.3%～3.3%が HIV 抗体陽性	
	【B 型肝炎の拡がり】 受検者の 15.4%～19.7%が HBV 抗体陽性	
フォローアップ調査 2002-2004	【STI 発症と HIV 感染リスクの相乗効果に関する情報】 正答率 60%⇒78%に上昇	80%に向上させる
	【ゴム耐性に関する情報】 正答率%から%に上昇	80%に向上させる
	【ドロップインセンター認知率】 2003 年 26%⇒2004 年 45%に上昇	
	【受検行動は大幅に改善】 過去 1 年間の HIV 検査受検率が 1999 年度 19%⇒2004 年 36%まで上昇	受検率を 10%向上させる
	【低いコンドーム使用率】 不特定相手とのアナルセックス時のコンドーム常用率 56%。特定相手 45%。	常用率を 5%向上させる
	【薬物使用の拡がり】 脱法ドラッグ使用経験率 23.5%	
エイズ発生動向	【大阪府エイズ発生動向】 2006 年　感染者報告数 125 名（うち MSM103 名）、患者数 24 名（うち MSM12 名）	エイズ患者として発見される MSM を 10 名程度から増加させない



(図 1. 3 次元評価モデル)



（図 2. 3 次元評価モデルとプログラムの位置づけ）

表2. インターフェイスのレベルによるプログラム分類

インターフェイス	プログラム	評価のツール
マスメディア	・ ホームページ	・ 認知 ・ アクセス数
	・ コミュニティペーパー ・ 予防啓発イベント ・ ハッテン場プロジェクト	・ 認知 ・ 定期購読率 ・ 来場者数
対面	・ STI勉強会 ・ ドロップインセンター	・ 来場者数 ・ インタビュー

表3. コミュニティーペーパー＜SaL+＞の配布実績

	平成17年度	平成18年度	平成19年度
店舗数（月平均）	192	190	187
団体数（月平均）	18	24	27
配布部数（月平均）	6, 172	6, 366	6, 502
ボランティア延べ人数（月平均）	27	23	21

表4. STI勉強会＜Café Chat＞の実績

年度	主なテーマ	参加者数 （月平均）	STI勉強会のテーマ
平成17年度	「好きなチンコ、嫌いなチンコ」 （参加者が粘土でチンコの張り型を作製） 「セックスの相手に求める要素」 （レーダーチャートを使用） 「一番感じるトコロ…あは～ん♪」（人体図を使用） 「ゲイ春SEXカルタ会2006」 （読み手はドラッグクイーン）	8.2名 スタッフ数 2～6名	梅毒 肝炎 HIV検査 感染経路
平成18年度	「最高のキスをしよう！」 （資材としてキスシーンのビデオを製作した） 「エロ語で遊ばナイト」 （参加者が資材作製に参加する方式を採用） 「ゲイ春SEXカルタ会2007」 （参加者が作成したものも採用した）	13.0名 スタッフ数 2～6名	精液接触におけるリスク コンドーム リミング アナルセックス 検査を意識したとき
平成19年度	「その気になっちゃう♪スキンシップ」 （王様ゲーム形式を採用） 「突撃！隣のセックス！」 （よりリラックスして参加できるよう、初めてカフェ形式を採用。以後偶数月に定着） 「コンドーム博覧会」 （アンケートを配布し、記入しながら意見交換） 「セックス川柳☆」 （MSMのセックスにまつわる川柳を作成し、展示。翌月のカルタ会に採用）	18.2名 スタッフ数 3～7名	ハッテン七つ道具 みんなの僕のセーファーセックス 梅毒 この症状何っスか？

表5. ドロップインセンター＜dista＞の実績

	平成17年度	平成18年度	平成19年度
総来場者人数 （月平均）	515.2	684.3	797.4
初来場者人数 （月平均）	19.7	30.9	35.1
相談件数 （月平均）	1.6	4.0	7.1
イベント開催状況	・週末カフェイベント（5プログラム） ・教室（気功・中国語・韓国語・手話） ・展覧会（木村べん展、龍谷尚樹展）	・週末カフェイベント（5プログラム） ・教室（韓国語・手話） ・展覧会（Easy!展、児雷也展）	・週末カフェイベント（5プログラム） ・教室（韓国語・手話） ・展覧会（snow white展、犬義展、ぼくたちの未来展、台東区男色春画展）
稼働時間帯	月～金、日）17:00-24:00 土）17：00-29：00	火～金、日）17:00-23:00 土）17：00-29：00	火～金、日）17:00-23:00 土）17：00-29：00

表6. 予防啓発イベント＜PLus+＞の実績

	平成17年度	平成18年度	平成19年度
実施月	11	10	10
総流入人数	7,340	14,000	10,000
主なプログラム	ステージ、展覧会、屋台、カフェ、ブース展示 フリーマーケット、クラブパーティ、陽性者交流会、芝居公演、土曜常設検査	ステージ、スライドショウ、ゲイタウン無料案内所、フォーラム、展覧会屋台、カフェ、ブース展示、フリーマーケット、クラブパーティ、陽性者交流会、土曜常設検査	ステージ、スライドショウ、ゲイタウン無料案内所、フォーラム、展覧会屋台、カフェ、ブース展示、フリーマーケット、クラブパーティ、陽性者交流会、土曜常設検査
連携団体/個人 （順不同）	シモーヌ深雪他、FOLLOW ゲイ商業施設、バザールカフェ、ＣＨＡＲＭ、JackintheBox、Visual+ ゲイ雑誌、コンドームメーカー、劇団 The Stag Party Show、他コミュニティメンバー多数	シモーヌ深雪他、FOLLOW ゲイ商業施設、バザールカフェ、ＣＨＡＲＭ、JackintheBox、Visual+、ゲイ雑誌、コンドームメーカー、疫学研究者	シモーヌ深雪他、FOLLOW ゲイ商業施設、バザールカフェ、ＣＨＡＲＭ、JackintheBox、Visual+、ゲイ雑誌、コンドームメーカー、疫学研究者、行政担当者、他コミュニティメンバー多数

表7. ホームページの実績

サイト名/運用時期	アクセス数	備考
MASH大阪/ 2007年9月25日～12月18日	PC:3247 携帯：48	平均サイト滞在時間：3分2秒（PC） 参照元：direct/google/yahoo/dista.be/mixi
dista.be/ 2007年9月25日～12月18日	PC:3034 携帯：2	平均サイト滞在時間：3分0秒（PC） 参照元：mash-osaka/yahoo/google/direct/mixi
SSI（セーファーセックスインフォ）/2007年9月25日～12月18日	PC:1250 携帯：86	平均サイト滞在時間：1分44秒（PC） 参照元mash-osaka/yahoo/google/hiv-map.net/direct
PLuS+/ 2007年9月20日～12月18日	PC:8382 携帯：177	-

アウトリーチマニュアル

① アウトリーチはmashの顔☆
アウトリーチはマッシュの顔です。一粒の汗で頑張ってる事をさりげなくアピール☆魅力倍増☆　でもしつこくなると不快だからキヲツケテ！

② 難しいことはわかりません☆
mash に関して何か聞かれたらわかる範囲で答えてね☆むつかしいことやお金のことを聞かれたらわかりませんと一言。笑顔を忘れずに☆

③ あくまで礼儀正しく☆
ドアをノックして入りましょう、お店によっては営業中に入ってこられるとむっとするお店もあるので要注意！特にカラオケ中は歌い終わるまで待つか、間奏の間に入りましょう☆

④ 爽やかさをさりげなく☆
さりげなく、爽やかさを出しましょう。涼しげな風をまとう爽やかさんになるには悪口や疲労感をお店の前では吹っ切っていきましょう。元気に挨拶することも大切です。
「いつもお世話になっております、mash 大阪です。新しいサルポジをお持ちしました。よろしくお願いします！」これがとっても大切！TPO を考えてうまーく自分色にアレンジ☆

⑤ お店にもプライバシー
お店を営んでいる方は頑張っています。それでも閉店、休業色んな事が起こります。mash は情報屋ではありません。アウトリーチで知った事を他のところで話さないようにしましょう。お店を応援する事が街の活性化に繋がる☆

困ったことや、クレームを受けたら dista に帰ってきて皆で情報共有しましょう！
忘れそうな時にはリストに書き込んで☆

なにかあった時、困ったときにはこちら
トシオ　090-○○○○-○○○○　もしくは　mash 大阪 事務局　06-6361-9300 までお電話ください☆

図 3. アウトリーチマニュアル

♣　♣　♣

ＭＡＳＨ大阪　質問紙調査

ドリンクチケット受け取り表

ドリンクチケット　　枚

残部数　　数

日付　：　　月　　日

店名　：　　お名前

担当者　：

＊　８月末にはお届けに参ります。ご都合の悪い場合はご連絡下さい。

連絡先　　ＭＡＳＨ大阪事務局　℡　06-6361-9300

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊キリトリ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ＭＡＳＨ大阪　質問紙調査（控）

ドリンクチケット　　枚

残部数　　数

日付　：　　月　　日

店名　：　　お名前

担当者　：

♣　♣　♣

図 4.　MASH 大阪質問紙調査の案内

表 8.　クラブ参加者対象のフォローアップ調査結果（%）

	1999 年	2002 年	2004 年	2006 年
コンドームキット受け取り率	–	69	64	–
コミュニティーペーパー受け取り率	–	–	52	34
ドロップインセンター認知率	–	–	45	34
予防啓発イベント認知率（2004年～PLuS+）	–	–	–	53
エイズ関連知識正答率	25~40	60	72	67
HIV検査受検率（過去１年間）	19	34	36	37
コンドーム常用率（特定）	37	46	51	61
コンドーム常用率（不特定）	59	56	62	67

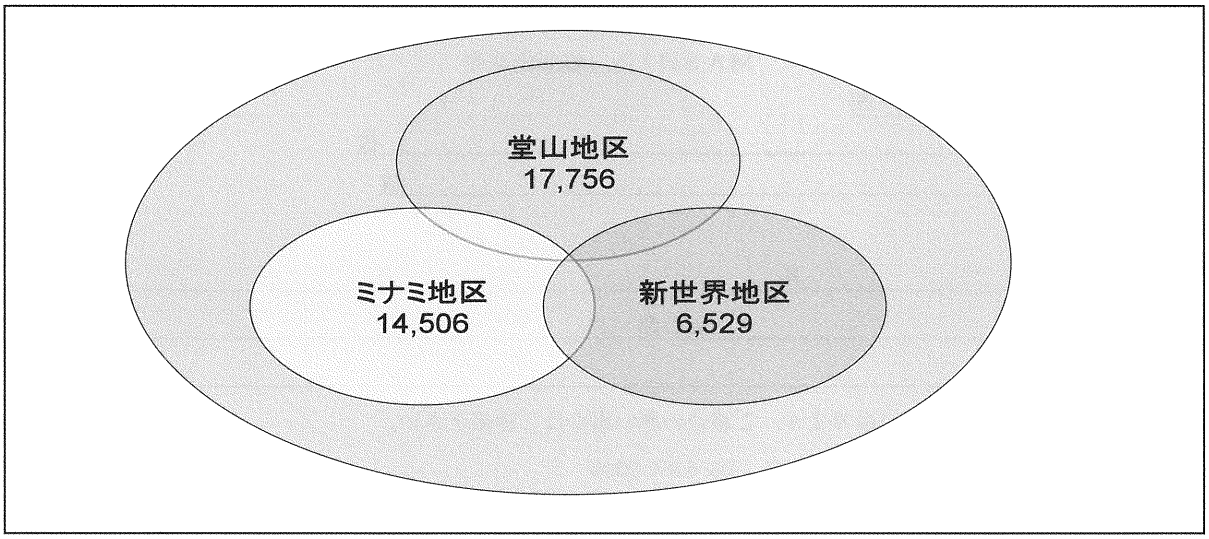


図 5. 大阪地域の主要 MSM 向け商業施設集積エリアにアクセスする MSM 実数

表 9. 大阪地域 MSM 集団向け HIV 予防のための協働モデル

	ターゲット層	予防事業の担い手	協働のテーマとなりうる要素
一次予防	大阪地域 MSM のうち未感染の人　約 15 万人	・ 予防 CBO ・ 疫学/社会学研究者	・ 受検行動への促し
二次予防	大阪地域 MSM のうち感染しているがそのことに気づいていない人推定 2300～3600 人（推定陽性者数から陽性判明者数を減じた数）	・ 公的検査機関 ・ 検査 CBO ・ 医療機関	・ 医療機関への接続 ・ 疫学情報の提供
三次予防	大阪地域 MSM のうち感染が分かっている人 800～900 人	・ 医療機関 ・ ケア CBO	・ 陽性者ニーズの掘り起こし ・ 地域の総ウイルス量減少

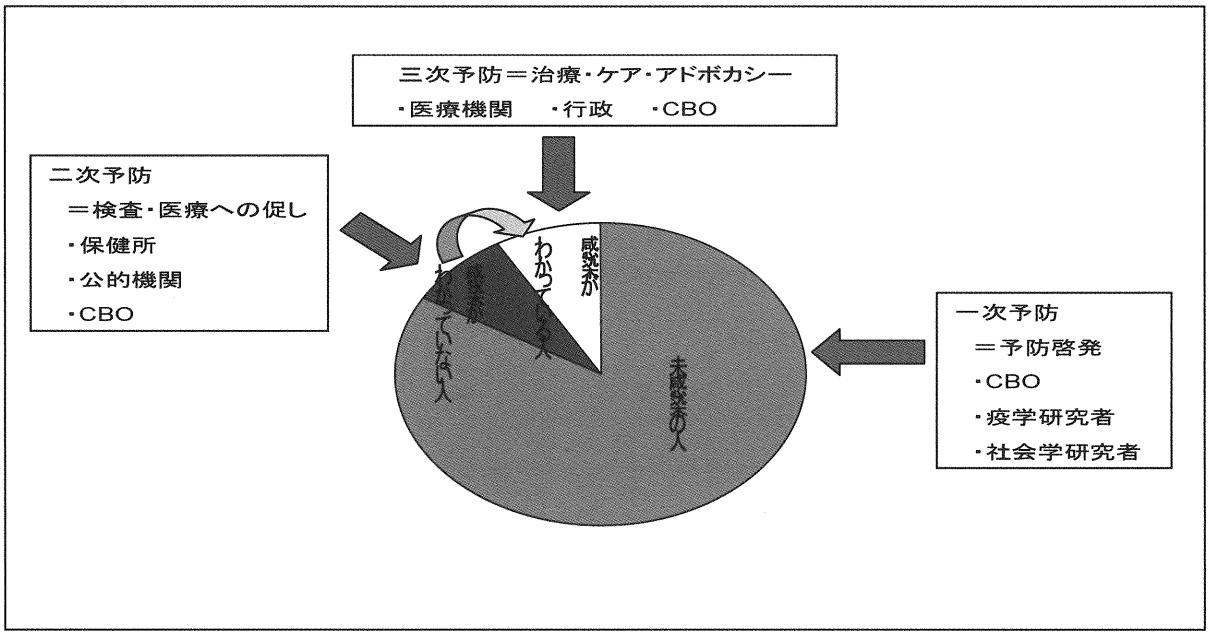


図 6. 大阪地域 MSM 集団向け HIV 予防のための協働モデル

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業（総合研究報告書）
男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究

福岡地域における同性間のHIV/STI感染予防啓発の普及促進に関する研究

分担研究者：山本政弘（独立行政法人国立病院機構九州医療センター）
研究協力者：森田朋樹、新納利弘、濱田史朗、牧園祐也、橋口卓、阿部甚兵、田淵靖浩、北村紀代子（Love Act Fukuoka）、井上緑（独立行政法人国立病院機構九州医療センター）

研究要旨

本研究は、以前より厚生労働省エイズ対策研究事業によるHIV疫学研究班および「男性同性間のHIV感染予防対策とその推進に関する研究」班において、特に東京、大阪、名古屋など大都市部を中心として行われて来た当事者主体による男性同性間のHIV感染予防対策に関する研究をさらに発展させ、今後感染者の増加が見込まれる地方都市においても当事者主体の有効な予防啓発活動が行われるべく、代表的な地方都市である福岡をモデルとして研究を行ったものである。

昨今大都市部のみならず、福岡など地方都市部においても感染報告の著増がみられ、さらにそのほとんどがMSMであることより、この研究活動の重要性が示唆される。

本研究では、大都市部とは違い多くの問題を抱える地方コミュニティにおいて、先行研究や先行事例を参考として地方独自の研究活動を行なった。また以前より継続していたコンドームアウトリーチやコミュニティペーパーなどの活動に加え、平成18年度より福岡住吉地区においてコミュニティセンター「haco」を開設し、活動の可視化に伴う有効性も検討した。また「haco」における活動としてはソーシャルネットワークなどの基礎的研究結果をもととして対象を層別化し、各層別の啓発戦略を構築し、その有用性を検討した。さらに活動の継続性普遍性を求めるべく、地元行政との共同啓発活動も模索した。また福岡よりさらに小さなコミュニティしかない地方の小都市ではHIV感染の診断治療だけでなく、男性同性間の感染に主体を置いた予防啓発もほとんど行なわれていないのが現状である。これらのことより福岡においては特に地方小都市の小コミュニティへの予防啓発活動の拡大、地域における啓発活動のネットワーク化もテーマに研究を行った。またコミュニティ内においても当事者たちの協力体制は重要であり、さらにコミュニティ内外においてもネットワーク、連携の必要性があり、このコミュニティ内外でのネットワーク構築も模索した。

また受検行動環境の改善のため、保健所における検査アクセスの改善を目指した活動も行なった。

それらの活動の効果評価として毎年度アンケート調査を行ない、福岡地域のゲイコミュニティにおける性意識、知識、性行動、検査行動などの年度変化を調査解析した。

A. 研究目的およびHIV患者受療状況

HIV感染者・AIDS患者報告数は、特に東京、大阪、名古屋などの都市部で急増が認められてきているが、近年その増加の波は地方へも波及してきている。特に福岡や沖縄などの地方都市においても大きな増加傾向を示してきており（図1）、さらに絶対数は大都市に比較して少ないものの、人口比でみると沖縄や福

岡では都市圏と同程度の感染の広がりがある。また図2の九州医療センターにおける受診患者内訳にみるごとく、その約三分の二は男性同性間の性的接触による感染である。さらに新規に感染が判明した患者の解析を行なった。図3のごとくここ3年間の患者増加は著しく、そのほとんどがMSMであった。さらに最近感染初期（急性期）に感染が判明する例もかなり増えているが、その一方でエイズ発症してから感染が判明する例も増加しており、全体として感染そのものが大きく拡大していることが伺い知れる。またこの3年間の新規に感染が判明した患者の年齢分布をみると（図4）、そのピークは30才前後にあるものの、全体として10代から60才以降まで幅広く分布している。MSM以外ではピークは40代であるが、この違いの原因としては以下のようなことが推察される。まずはこの年代は妻帯者が多いという特徴があり、場合によっては自らのセクシャリティをカミングアウトすることに大きな抵抗があることも考えられる。またこの年代は海外出張などが多いこともあげられるだろう。

次に診断にいたった契機について検討した（図5）。エイズ発症で初めて診断がついた例も増加しているが、その一方で平成16年度より性感染症合併例においてHIV抗体検査が保険収載されたことを受け、平成17年以降、他の性感染症を契機としてHIV感染の診断にいたる例が急増している。これらよりは一般医療機関におけるHIV抗体検査の促進が早期発見につながることを示唆している。その一方で保健所での検査における感染判明は若干増加傾向を認める程度である。

次に最近とみに増加している急性期患者について解析した。保健所と医療機関で判明することが約半々であるが、多くが急性期症状を呈していることが認められる。またその多くは、B型肝炎、梅毒、クラミジアなどの他の性感染症を合併しており、ここでも性感染症診療現場でのHIV抗体検査促進がHIV感染症の早期発見につながることが示唆された。またこれら急性感染患者のHIV系統樹を作成したところ、ほぼ全例がここ3年間の福岡地域内での感染と推定されるにも関わらず、ウイルスの系統的にはばらばらであり、多くの感染源より感染が広がっていることが示唆され、今後のさらなる感染拡大が示唆される所見となっている。

これらのデータよりは今後福岡などの地方都市にても感染者の増加、特にMSM間の感染拡大は避けられそうになく、地方都市におけるゲイコミュニティにおいても有効な啓発活動の必要性が示唆されている。

今回我々は代表的な地方都市である福岡において、ゲイコミュニティ主体の啓発活動を試行し、今後さらなる感染者の増加が見込まれる多くの地方都市における啓発事業のモデルとなるべく、さらに他の多くの地方都市へとその活動を広げるべく研究活動を行った。

B. 研究方法および結果

1. 知識および行動変容への展開における啓発活動の継続

以前より継続してきたコンドームアウトリーチやコミュニティペーパーなどによる啓発活動は、先行研究にあるようにこれまでにもその有効性が実証されてきており、本研究においても継続するとともに対象となるターゲット、それぞれに対して個別の展開を試みた。また後述する平成18年度より開設したコミュニティセンターとの相乗効果についても検討した。

1）コンドームアウトリーチ

（目的、方法）

福岡のゲイコミュニティにおいて、コンドーム使用率を上げるために必要な環境を作ることを目的とし、平成16年度より住吉・春吉を中心としたゲイコミュニティ商業施設を中心にコンドームの配布を継続して実施している。またゲイコミュニティへ向けたメッセージを同封したオリジナルコンドームの作成に

より、さらにコミュニティとの密接な関係を構築することで、各施設への配布協力要請を容易にし、またパッケージを独自にデザインすることでピックアップ率の向上を目指した。さらによりコミュニティに近い場所でのコンドームアクセスを容易にするために、クラブイベント、スポーツイベント、各商業施設店舗へも配布を行った。

平成 18 年度では特にゲイ向け雑誌に連載されていた人気マンガ作者にパッケージデザインを依頼し、マンガに登場するキャラクターを起用、またパッケージ裏面にメッセージを同封することで、主に性行動の活発な若年層へ対するアプローチを試みた。

さらに若年層とは違い、中高年層では、情報も届きにくく、やはり予防行動や受検行動も少ないため、AIDS 発症して初めて感染が確認される患者が多いとされ、中高年層へのアウトリーチの重要性も再認識されている。そこで 19 年度には通常のコンドームアウトリーチに加え、中高年 MSM をターゲットとしたフケ専（中高年向け）バーのピックアップ率増を狙い、中高年向けコンドームも製作、配付した。図 6 にそれらのオリジナルコンドームのサンプルを示す。

また近隣の地方小 MSM コミュニティとのネットワーク構築のため、平成 17 年度より福岡市内だけでなく北九州小倉地域へのコンドームアクセスの展開を継続している。福岡市から程近い北九州市にも対象となる MSM 向け商業施設が 16 軒程あり、博多とは異なるコミュニティを形成している（対象地域、福岡県北九州市小倉地区のバー13 軒、ハッテン場 3 軒）。

（結果）

3 年間の配布数は表 1 のとおりである。

表 1　コンドームの配付数（3 年間）

平成 17 年度	約 13,000
平成 18 年度	23,690
平成 19 年度	14.640

（考察）

この 3 年間で 50,000 個以上のコンドームアウトリーチを行なってきたわけであるが、これらのコンドームアウトリーチがどのような予防効果があったか考察する。直接的な予防効果としては、かなり乱暴な計算ではあるが、ゲイコミュニティにおける HIV 罹患率を 4% と仮定し（NLGR 検査会などのデータより）、一回の性交渉での感染率を 0.1% と仮定すると、無防備な 50,000 回の性交渉では 2 人の感染者を生み出すこととなるため、50,000 個のコンドーム配付は直接的な効果としても感染を 2 人防いだこととなり、生涯治療費が約一億円と言われる HIV 感染症においてはこの 3 年間で直接的にも約 2 億円の医療費削減の経済効果があったと推察される。

もちろん本来コンドームアウトリーチは直接的な予防効果を狙ったものではなく、コンドーム使用になじみの少ないゲイコミュニティにおけるコンドームアクセスの改善が目的であるため、配付されたコンドーム以上にコミュニティ内におけるコンドーム使用率全体の上昇によってさらに数倍から数十倍の効果があがるであろうことは容易に想像され、昨今のメタボリックシンドローム予防啓発などとは比較にならない経済効果率であると考えられる。

これらのことより、ゲイコミュニティにおけるコンドームアウトリーチは国民の健康増進だけでなく、医療経済的にも極めて有効であり、今後も継続発展させていくだけでなく、地方の小都市などにも活動を拡げていく必要性がある。

なお地方小コミュニティにおける当事者主体の啓発活動立ち上げのモデルとなりうる小倉地域におけるアウトリーチについては、小倉でのキーパーソンとの連携が重要な課題になると考えられる。この 3 年間では難しかった小倉地域への配布活動を積極的に行うためには、小倉コミュニティでの単独イベントのサポートなどを通じ、配布協力が可能な地域

内キーパーソンの育成が今後重要であると考えられ、さらなる検討研究が必要である。

2) コミュニティペーパー「season」（図7）

（目的、方法）

コミュニティにおける情報伝達やよりスムーズなコンドーム配布等啓発活動などの効果的な啓発アプローチのために、平成16年度よりコミュニティ情報に基づいたコミュニティペーパーを季刊で作成・配布した。この中には、HIV/エイズ情報や予防知識はもちろんのこと、コミュニティマップ、各店舗に関する情報なども盛り込み、より関心を得て、ピックアップ率が上がるよう工夫した。このコミュニティペーパーはオリジナルコンドームとほぼ同時に配布した。

（結果）

3年間の発行部数は表2のとおりである。

表2　コミュニティペーパー発行部数（3年間）

	配付回数	配付総数
平成17年度	3回配付	5,700
平成18年度	3回配付	5,790
平成19年度	3回配付	11,000

（考察）

先行研究にもあるようにコミュニティペーパーの認知は予防行動につながり、ゲイコミュニティにおける予防啓発には非常に有効な手法であるため、コミュニティ内での認知向上に努力する必要がある。

後述する平成 18 年度よりのコミュニティセンターのオープンにより LAF の活動そのものがより可視化されるようになり、これとの相乗効果にて、「season」も認知向上が起こり、その結果、協力者（取材の承諾、寄稿者）など増加し、CBO とコミュニティの連携がより亢進され、より有効な啓発となってきている。今後もこのような活動を長期にわたり、継続していく必要があることはいうまでもない。

3)その他のコミュニティ内における啓発活動

平成 18 年度のコミュニティセンター「haco」開設以後は、「haco」を中心とした啓発活動を展開することになったが、それ以前にも平成 17 年度から 18 年度にかけ、コミュニティ内での啓発活動を行なっている。同じコミュニティの中でも年齢の違いや帰属意識の違い、予防への関心度の違いなどで、いくつものグループに分かれており、同一プログラムによる予防活動では逆効果になることもある。福岡における啓発活動では対象となるターゲット、それぞれに対して個別のプログラムを計画した。

(1)ゲイバー等商業施設利用者対象

(a) studio

ゲイバー等商業施設利用者を主な対象として知識の向上を目的とした勉強会を開催した（図 8)。

・平成17年12月16日

コミュニティでのMFSS展

・平成18年1月

HIV/STI自体の知識よりも、より具体的に「かかったらどうなる？」に重点。

①保健所での、実際の受検方法

②感染後の現状や具体的な生活（保険・福祉・医療・職労など）について

(2) 性行動の活発な若年者向け

コミュニティ内においても性行動が活発な若年層をターゲットとして、クラブイベントを行ない、啓発活動を行なった。

(a) colors(クラブイベント)

・平成17年12月2日実施、参加者数234名

(b) oh!(クラブイベント)

・平成 18 年 7 月 14 日（金）ー15 日（土）参加者数 135 名

(3)インターネット利用層対象

(a) ホームページ作成

ゲイバー等商業施設へのアクセスが少ないインターネット利用層を主な対象として、予防啓発に関する情報を発信した。内容としては、活動内容の広報、

HIV/AIDS を含む性感染症に対する予防啓発の情報提供、コミュニティペーパーのバックナンバー掲載、他団体や検査情報とのリンクなどである。

(b) LAF研修会（図9）

商業施設にアクセスのある層だけでなく、インターネット利用層をも対象として、知識の向上を目的とした啓発活動も行った。事前にタイトルを地元でアクセス数の多いコミュニティ向けのサイトにて告知し、参加希望予約の連絡を受け付けることとした。また開催会場は、コミュニティ内商業施設への出入りに不安を感じる層へ対応するため公共の場所を使用した。

平成17年度

・第1回　5月14日（土）参加者6名
「HIV予防啓発における研究評価とMSMのメンタルヘルス」講師：日高 庸晴 氏

・第2回　7月16日（土）参加者9名
「HIV感染者／患者支援とセルフケア」講師：城崎 真弓 氏

・第3回　10月23日（日）参加者13名
「HIV基礎講座①」講師：北村 紀代子 氏

・第4回　「HIV基礎講座②」

(4) ゲイコミュニティへの積極的な参加がない、あるいは予防啓発に興味のない層向けの参加型啓発イベント

(a)「博多夏宴」ドローイングパーティ

ゲイコミュニティへの積極的な参加がない、あるいは予防啓発に興味のない層に対しては通常の啓発イベントではなかなか情報が届かない。今回このような層に対しても、実際に啓発資材作成の課程に参加することにより、予防啓発に対してより関心を持ってもらうことを目的とした。70人～80人のMSMが参加、2枚の絵が完成した（図10）。

2. 活動のネットワーク化、ブランチ化に関する試み

特に人的資源や予算等に乏しい地方において、長期に渡り実現可能な活動を目指すためには、コミュニティ内での連携および多くの関係機関との連携、ネットワーク化が必要である。

また福岡よりさらに小さなコミュニティしかない地方の都市では、各地域の中心となるコミュニティより周辺コミュニティへの活動の拡大、支援が必要である。

これらのことより、福岡地域においては、コミュニティ内外や周辺小コミュニティとの連携、ネットワーク化を試みた。

1) コミュニティ内における活動のネットワーク化

(1) 商業施設との協働

コミュニティ活性化プログラム

『Lesbian & Gay HAKATA Summer Festa　博多夏宴2006』

（目的）

コミュニティでの当事者主体型の予防啓発活動を継続していく上で、コミュニティ内での協力体制は必要不可欠である。しかしながら、コミュニティ内においてキーパーソンとなるゲイバー等商業施設はもともとが営利組織でもあり、ボランティア主体の予防啓発活動との協力関係構築は困難な面も認められた。そのため、商業施設との協力関係を推進するため、コミュニティ全体の活性化を主体とし、そのなかで啓発活動を行うコミュニティ活性化プログラムを考案した（図11）。

（方法）

夏の性活動が活発になる時期に、効果的な予防啓発活動を行うために、LAFで初のmen only クラブイベント「oh!」や「ドローイングパーティー」等のイベントを企画した。

ゲイコミュニティ内にてイベントが集中して開催されることと、2003年に実施した「wave」での実績があったためコミュニティ側からの逆提案があり、夏期期間中に行なわれるイベントの紹介と啓発記事、MAPを一つの冊子にまと

め、6000部を印刷した後、広く全国に配布しコミュニティの活性化を図った。

地元ゲイナイトと提携し携帯を使ったマッチングシステムをクラブイベント「oh!」や「ドローイングパーティー」「浴衣祭り」で利用できるようにし、コミュニティやイベントオーガナイザーとの連携をはかった。

各イベントでコンドーム配布やLAFの活動の紹介などを行ない、LAFの認知を図った。

（考察）

コミュニティを活性化する目的の商業施設との協働イベントは、予防啓発活動においてコミュニティ内の協力体制、ネットワーク確立のため有効であることが示唆された。

(2)コミュニティセンター「haco」

詳しくは後述するが、コミュニティ内の協力体制、ネットワーク化においてコミュニティを活性化目的の商業施設との協働イベントは有効であったが、その効果はイベントの時だけの一時的効果でもある。今後長期に渡ってコミュニティ内のネットワーク化を図り、有効な啓発活動を継続させるためにはAkta(東京)、Dista(大阪)などの先行事例にもあるようにコミュニティ内に予防啓発のためのコミュニティセンターが設置され、当事者主体の継続的な予防啓発活動が行われることが望ましいため、平成18年度より博多住吉地区にコミュニティセンター「haco」を開設した（図12)。

2) 各地域のコミュニティにおける活動のネットワーク化－博多から北九州市へのアウトリーチ－

（目的）

福岡よりさらに小さなコミュニティしかない地方の都市ではHIV感染の診断治療だけでなく、男性同性間の感染に主体を置いた予防啓発もほとんど行なわれていないのが現状である。このような地方の小コミュニティでは大都会ほどの感染者の報告はないが、小さなコミュニティであるだけに一度HIV感染が入り込むと一気に感染が拡大する危険性も秘めている。またHIV感染の診断体制自体が不十分であることも多く、地方の小コミュニティでの感染拡大は十分に把握されてない可能性もあり、地方の小コミュニティに対する予防啓発は今後重要性を帯びてくるものと思われる。

しかしながら、それぞれの小コミュニティにおいて各コミュニティ独自の予防啓発活動を行なうことは特に地方の小さなコミュニティにおいては人的、物的にも困難を極める。各地域の中心となるコミュニティより周辺コミュニティへの活動の拡大、支援が必要である。

（方法）

福岡市から程近い北九州市にも対象となるMSMの集うバーや発展場などが併せて16軒程あり、博多とは違った人脈でコミュニティを形成していることから、北九州小倉地域へのコンドームアクセスの展開を試みた。

a) 対象地域：福岡県北九州市小倉地区のバー13軒、ハッテン場3軒
b) 対象地域の都市規模：北九州の人口約99万人

（考察）

問題点としては各地域の中心的コミュニティの予防啓発メンバーだけでは周辺の小コミュニティ全てに対してアウトリーチ等の活動を長期継続していくことは困難であり、小コミュニティ独自の啓発活動を育成、支援する必要性が認められた。

3) 行政との連携強化

今後も感染者の増加が見込まれる現状においては、予防啓発活動の長期的継続が必要となる。またより有効な活動のためにも、今後は行政などとの一体となった取り組みが必要とされるが、現在までコミュニティと行政との協働の予防啓発活動は少ない。今回福岡においてはエイズデーイベントにおいて、コミュニティと行政との協働で啓発イベントが開催された。

（結果）

・平成17年「My first safer sex」「はじめて性感染症予防のコトを考えた時」－さまざまなLIFE STILE・それぞれのREAL－写真

＆メッセージ展。

・平成 19 年　博多エイズ映画祭

（考察）

MSM における啓発活動にて長年培ってきたノウハウを MSM 以外の大衆への啓発活動にも活用でき、有効な連携であったと考えられるが、患者の急増に目をつぶった地方行政におけるエイズ対策予算のカットなど前途は多難であり、いくらボランティア団体が奮闘したとしても、今後さらに地方における患者増加に拍車がかかる可能性は否定できない。

4）行動環境の改善、検査アクセスの展開

予防啓発のひとつとして感染者の早期発見が重要であることは現在までにも指摘されてきているが、福岡のような地方都市では特定の対象者向けの検査会などは人的、物的にも難しく、また地方における閉鎖的環境よりプライバシーなどから困難であるため、従来より地方においても機能している保健所の検査相談事業へのコミュニティメンバーのアクセス改善、検査環境改善を目的とした活動を行なった。

(1)福岡県エイズカウンセリング研修会

医療と行政による検査相談事業の環境改善を目的とした多業種による講義とロールプレイの研修会を開催し、セクシャリティ理解を含めた検査環境改善、検査アクセスの改善を目指した。毎年度１回ずつ開催。

(2)保健所（保健福祉センター）との協働

コミュニティメンバーによる実際の検査課程見学や保健所職員との面談を通じて実際の受検課程を調査し、意見交換を行った。さらにこの情報をコミュニティペーパーにて広報することにより、受検行動拡大への啓発を行った。

3. コミュニティセンター「haco」開設による効果とソーシャルネットワークを考慮した層別啓発戦略の構築

（目的、方法）

平成18年年度より、福岡市内のゲイコミュニティ内にコミュニティセンター「haco」が開設され、ここを中心とした啓発活動を開始した。そこでコミュニティセンター「haco」開設に伴うCBO活動の可視化が起こったが、このことにより福岡地区におけるCBO啓発活動にどのように変化があったのかを解析する。さらにコミュニティセンター「haco」における啓発活動においてはソーシャルネットワーク研究から得られた情報をもとに啓発対象を層別に分類し、それぞれに対する啓発戦略を構築した。

ソーシャルネットワーク研究のデータからはMSMコミュニティはCBOを中心に考えると以下のように層別化されると思われる（図13）。

第0層：CBOまたは予防行動が十分にできる層

第1層：予防に興味のある層

第2層：CBOに接点はあるが予防に興味のない層

第3層：コミュニティに接点はあるがCBOに接点のない層

第4層：コミュニティとの接点もないいわゆるhard-to-reach層

さらにソーシャルネットワーク研究の解析よりはより第0層に近づくほどより予防行動をとることがわかっている。これらのことよりコミュニティセンター「haco」においては各層別に対象を絞り、それぞれをよりCBOへと近づけることを目的とした活動を行なった。

（結果）

コミュニティセンターにおける各イベント、活動に関しては平成19年度報告書に詳細を記した。平成19年度にコミュニティセンター「haco」への来場者数は表3のとおりである。

表3　平成19年度コミュニティセンター「haco」来場者数

期間	月合計
4 月	47　名
5 月	85　名
6 月	60　名
7 月	166　名

8月	135　名
9月	167　名
10月	146　名
11月	97　名
12月	55　名
合計	958　名

（考察）

コミュニティセンター「haco」の開設とソーシャルネットワーク研究結果から導きだされた層別啓発戦略を用いて啓発活動を行なった。その結果、まず活動の可視化に伴う認知度の上昇がみられ、それに伴い、コミュニティ内外との連携が大きく上昇した。この結果は当班の分担研究である「インターネットを利用した調査研究」においても証明されている。またコミュニティ内のhard-to-reach層（情報の届きにくい層）に対しても認知度の向上がみられ、それらの層が今後CBOの啓発活動や資材との接点を持つことにより、予防行動向上が期待される。

4. 性意識、知識、性行動、検査行動などの調査解析

（目的、方法）

コミュニティにおける啓発活動の効果評価の一環として、性意識、知識、性行動、検査行動などについて毎年度調査を行い解析した。

対象:イベント等に参加したコミュニティ構成者

方法：無記名のアンケート方式

（結果）

詳しい解析は各年度報告書に譲るが、3年間を通してアンケート結果を俯瞰すると、対象数が少ないため、統計学的有意差はでないもののこの3年間の活動にて、コミュニティ内でわずかながら予防行動の向上がでてきつつあるのではないかと考えられる。これらの効果がすぐに現在の感染者の増加傾向にブレーキをかけるものとは考えにくいが、将来的には大きな効果となってくれるものと期待できる。特に学校教育現場での性教育が全く不十分な現状では、これらの社会にでてからのボランティア活動、啓発活動に頼るしかすべがなく、今後も研究発展が必要である。

C. 考察および提言

本研究は平成17年度より3年間にわたり、地方都市として代表的な福岡地域における、特にMSMを対象としたHIV感染予防啓発研究を行なったものである。上記受療状況の報告からも特にこの3年間は福岡のような地方都市においても感染の拡大傾向が強くなってきた時期であり、本研究の重要性がさらに増した3年間であったといえる。

そのような状況の中で福岡地域では、先行研究を参考としつつ、特に地方としての問題点を克服しながら研究活動を行なってきた。そして特に人的にも物的にもまた地方行政からの予算も都市部と比較すると全く不十分な状況のなかで少しでも有効な研究活動ができるよう努力してきた。

特にこの3年間力を入れたのは、一ボランティア団体だけでは継続の困難な啓発活動における、多くの関係機関やコミュニティ、周辺小コミュニティとの連携、ネットワークづくりであり、この3年間である程度のネットワーク構築ができたものと思われる。これらのネットワークが今後十分に機能するかどうかは、今後の行政その他の支援にかかっていることはいうまでもないであろう。

また特筆すべきはコミュニティセンターの開設であり、ここを中心とし、ソーシャルネットワーク研究結果から導きだされたコミュニティ内の層別化と各層別の啓発戦略の構築である。これらの有効性の評価はこれからであるが、コミュニティ内での活動の可視化、認知の向上等の大きな効果を得始めており、今後もこれらの活動の継続発展の必要性はさらに大きくなってきている。

現在のような感染の拡大傾向が続くと近い

将来に本邦の感染者は数十万人レベルを突破するのは確実であり、そのことはイコール数十兆円の新たな医療費の増加を意味しており、医療経済に大きなダメージを与えることは否定できない。さらにHIV感染そのものも多くの働き盛りの人々が「障害者」となることを意味しており、医療費の増大以上に日本経済に大きな影響を与えることも否めない。そのためHIV感染予防施策は現在最も優先して行なわれるべきものであることは論を待たない。その中でも特に感染の拡大傾向の高い地方のMSM集団への予防啓発施策のさらなる進展が望まれている。

D. 発表論文等

論文発表

1) 狩野繁之，源河いくみ，吉田邦仁子，岡慎一，伊藤俊広，佐藤功，片倉道夫，間宮均人，渡邊清司，上平朝子，白阪琢磨，山本政弘、宮村知也：わが国のHIV/AIDS患者に合併する寄生虫症，Clinical Parasitology，(1341-5190)，15巻1号，Page95-98(2005.02)
2) Rumi Minami, Masahiro Yamamoto: Elevated serum levels of RCAS1 are associated with a poor recovery of the CD4+ T cell count after ART in HIV-1-infected patients, J AIDS Research, 8(1), 25-27, 2006
3) Tomoko Tanaka, Taijiro Okabe, Shigeki Gondo, Mitue Fukuda, Masahiro Yamamoto, Tsukuru Umemura, Kenzaburo Tani, Masatoshi Goto, Toshihiko Yanase, Hajime Nawata: Modification of glicocorticoid sensitivity by MAP kinase signaling pathways in glicocorticoid-induced T-cell apoptosis, Experimental Hematology, 34(11), 1542-1552, 2006.
4) Yoshimichi Tachikawa, Takamitsu Matsushima, Yasunobu Abe, Seiji Sakano, Masahiro Yamamoto, Junji Nishimura, Hajime Nawata, Ryouichi Takayanagi, Koichiro Muta : Pivotal role of Notch signaling in regulation of erythroid maturation and proliferation, Eur J Haematol, 77, 273-281, 2006
5) 浦田保志，安田勝，岡部泰二郎，山本政弘，竹下盛重：AIDS患者にみられたKaposi肉腫の1例，皮膚科の臨床，0018-1404，48巻2号，2006
6) 南留美，山本政弘：高熱，リンパ節腫脹を繰り返した後発症したHIV-1陽性HHV-8関連Castleman病の一例，感染症学会雑誌，80 (4)，423-427，2006
7) Rumi Minami, Masahiro Yamamoto, Soichiro Takahama, Tomoya Miyamura, Hideyuki Watanabe, Eiichi Suematsu: RCAS1 induced by HIV-Tat is involved in the apoptosis of HIV-1 infected and uninfected CD4+ T cells, Cellular Immunology, 243, 41-47, 2006
8) Hiroyuki Gatanaga, Shiro Ibe, Masakazu Matsuda, Shigeru Yoshida, Tsukasa Asagi, Makiko Kondo, Kenji Sadamasu, Hiroki Tsukada, Aki Masakane, Haruyo Mori, Noboru Takata, Rumi Minami, Masao Tateyama, Takao Koike, Toshihiro Itoh, Mitsunobu Imai, Mami Nagashima, Fumitake Gejyo, Mikio Ueda, Motohiro Hamaguchi, Yoko Kojima, Takuma Shirasaka, Akiro Kimura, Masahiro Yamamoto, Jiro Fujita, Shinichi Oka, Wataru Sugiura: Drug-resistant HIV-1 prevalence in patients newly diagnosed with HIV/AIDS in Japan, Antiviral Research, 75, 75-82, 2007
9) Hiroyuki Gatanaga, Tsunefusa Hayashida, Kiyoto Tsuchiya, Munehiro Yoshino, Takeshi Kuwahara; Hiroki Tsukada, Katsuya Fujimoto, Isao Sato, Mikio Ueda, Masahide Horiba, Motohiro